

大友氏の栄華を物語る壺 華南三彩 ~戦国時代の竹中地区~

大友氏は早くから海外との交易に深く関わっていました。なかでも宗麟は、ポルトガル船の府内への入港を進めると共に、自ら大型船を造って中国や東南アジアの国々に進出し、大きな利益を得ました。竹中にある勝光寺には、その南蛮貿易の輸入品の一つであった「華南三彩」の壺が、今に伝えられています。



華南三彩貼花文五耳壺（勝光寺蔵 大分市歴史資料館寄託）

華南三彩

華南三彩は、緑・黄・紫の三色で彩られた陶器で、16世紀に中国南部で生産されました。日本には日常的に使われる陶器と違い、当初は祭具用として持ち込まれ、その後、室内の飾りや茶の湯などに関わって輸入されたと考えられています。大名や商人に関わる遺跡での出土例が多いことから、高価で、珍重された品であったと考えられます。

華南三彩貼花文五耳壺〈大分市指定有形文化財〉

大友氏初代能直ゆかりの勝光寺には、花の文様などを貼り付けた独特な「華南三彩貼花文五耳壺」が伝えられています。同様の壺は、国内では大名やお寺の遺品として残っており、「茶壺」として利用していたと伝えられています。勝光寺の記録によると、秘蔵品の一つに池邊大膳正が所持した「茶壺」があると記され、これが上記の壺に当たると考えられています。秘蔵品の中には、宗麟愛用の、今は無き「松風の茶釜」もあったと書かれています。これらの茶道具は、勝光寺をはじめとする禅宗寺院に広く普及していた喫茶の慣習には欠かせないものであり、勝光寺に帰依した大友氏やその家臣である池邊氏から同寺に寄進されたものと考えられます。勝光寺に伝わるこの壺は、大友氏の茶の湯の嗜好を表す遺品の一つであると同時に、大友氏の栄華を物語る貴重な資料といえます。

府内のまちと華南三彩

府内のまちの発掘調査では、壺や盤（おおざら）をはじめ、鴨や鶴の形をした水注（茶の湯で使う水差し）、鳥や馬の形をした水滴（硯に水を入れる容器）などが数多く見つかっています。出土量は南蛮貿易の中継地であった琉球（沖縄県）に次いで多いことから、当時の府内が南蛮貿易において国際貿易都市である博多や堺を遙かにしのいでいたことが窺えます。



さまざまな華南三彩（大分市歴史資料館蔵）